つつじ通信
83号
2023.4.10　発行

下肢静脈瘤について

心臓血管外科部長　惠木　康壮

下肢静脈瘤どうしたらいいの？どこに診てもらえるの？治療が必要なの？
そんな疑問にお答えします。

この病気は命にかかわることはありません。しかし、一度なってしまうと自然に治ることはありません。そんな命にはかかわらない、ただ何となく気になる静脈瘤についてお話いたします。

静脈瘤の原因は、静脈の弁が壊れて起こる病気です。弁とは、血流が一方方向に流れるように制御しており、弁がうまく閉じないと、血液の逆流を生じます。逆流が生じた血管は、内圧が上昇し、太くなり、特に膝下で、血管が蛇行して瘤になります。そのため、弁に負担がかかる状態が続くと弁不全となり、静脈瘤を形成します。

弁の負担は年齢とともに増加し、妊娠を契機に弁が壊れることがあるので、女性の方が男性より２－３倍多く発生します。その他、原因として、立ち仕事、肥満、遺伝の要素もあります。推定の患者数は1000万人を超え、60歳以上の女性では、60%以上もっていると言われています。

図１　伏在型静脈瘤

症状は、だるさ、むくみ、こむら返りがあり、足のむくみがひどくなって、うっ滞性の皮膚炎となり、皮膚が茶色くなってしまうことがあります。

皮膚の色が変わってしまうと、治療してもなかなかきれいになるのが難しくなります。そのため、手術のタイミングとしては、皮膚の色が変わる前、だるさなどの症状があれば、治療をお勧めいたします。ただ、長年かかって静脈瘤を形成しているので、今あるだるさ、むくみが静脈瘤からきているのか、判断に悩むことがあります。あきらかに、ふくらはぎに瘤の形成がなければ、単純に疲れかもしれません。その場合は、弾性ストッキングを日中だけ履いて経過をみるのも良いと思います。

明らかにぼこぼこした静脈瘤がある場合は、心臓血管外科、血管外科の受診をお勧めいたします。

ただ、注意があります。静脈瘤も大きく分けて、２種類あります。簡単に言うと、大きいの（図１）と小さいの（図２）です。大きい静脈瘤は、どこか太い血管で、弁不全が起きてなっているので、積極的に治療が必要となりますが、小さい静脈瘤、網目状、蜘蛛の巣状といわれるものですが、これは弁不全がなくても、加齢で起きているので、あまり積極的な治療は行いません。

図２　蜘蛛の巣状静脈瘤

さて、静脈瘤の治療ですが、一番の目的は逆流している血管の逆流を止めるのが目的です。

逆流を止めることで、血管の圧力が下がり、瘤が小さくなり、むくみ、だるさがとれるのです。逆流の止め方は、3種類あります。１ストリッピング（抜去術）、２レーザー治療、３グルー治療の３つです。そのうちのレーザー治療（図３）が日本では１番多く施行されております。それぞれ短所、長所がありますが、レーザー治療は皮膚を切らずに血管に針を刺して、血管の中にファイバーを通し、血管を内側から焼灼して血流を止めます。３のグルー治療は、こちらも切らずに治療できますが、血管の中に、接着剤をいれるため、血管内に異物が残ったままになります。そのため、痩せてる方などは、皮膚の上から、こりこり固いグミのように触れてしまいます。そのためレーザー治療が可能であれば、レーザー治療を一番にお勧めいたします。

当院でも導入し、血管の焼灼（レーザー）だけの手術であれば、10－15分ほどの時間です。また、瘤が大きい方には、同時に瘤をとる手術も併用いたします。瘤をとるといっても、昔のように皮膚をメスで切らず、こちらも、針の穿刺の穴から瘤をとるので、ほぼ傷跡は残りません。

大丈夫かな？どうしよう？足がつるなー。悩んでいる方はぜひ、一度心臓血管外科、あし外来（血管）を受診してみてください。

図３　レーザー治療のイメージ